



北海道立北の森づくり専門学院
学院長 寺田 宏氏

今春の入学生は34人で、40人の定員には達しなかったが、国内に見られる林業系の学校では比較的、学生

全道をフィールドに実習

をとおっている。「百年先を見据えた森林づくりを推進する。道内外から入学生を確保し、林業・木材産業の幅広い知識と確かな技術を身に付け、将来的に企業等の中核を担う地域に根差した人材を育成するというのが学院設置のコンセプト」と寺田宏学院長は語る。道庁入庁後ほぼ一貫して林務畑を歩み、水産林務部林務局森林整備課長から現職に就いた。「北海道という優位性の高い地域で、森づくりを学び実践することは、学生にとって大きなアドバンテージとなる。プライドと自信を持って仕事を続けるためのモチベーションにつながる」と確信しています。



▲2021年に完成する新校舎イメージ

数は多い。本州から8人のほか、道内は札幌圏や旭川圏、釧路や音威子府など文字通り全道各地から集まっ

た。これまで高校などで林業を学んできた人はほとんどおらず、そこからは森づくりや木材に関連する仕事に就きたいという熱意と意欲が感じられる。実習が授業の3分の2を占める。全道各地の森林・林業・木材産業について学ぶ講義と多様な森林等を活用したカリキュラムだ。「森へ入る」ことから始まり、「知る」「営む」「造る」「操る」



▲道庁ロビーに展示されている来年10月9日「全国育樹祭」のカウンタダウンボード

「拓く」「使う」「活かす」「人と交わる」とステップを踏んでいく。林業先進国で気候や地形などで北海道との共通点が多いフィンランドのリベリア林業専門学校と覚書を結び、協力体制を構築した。全国で初めて導入したシミュレーターもフィンランドの技術が生かされたものだ。高性能林業機械の操作技術を取得する。そのほか、ドローンやICT等の新技術を活用した森林調査、冬季調査に必要なスノーモービルの運転技術、豊かな心を育む木育などのカリキュラムが組み込まれている。上級救命講習や刈払機取扱

作業者、伐木等業務従事者玉掛け、小型移動式クレーン運転など林業・木材産業で働くために必要な14の資格を取得できるのも大きい。「全道をフィールドに実習するのは卒業後、全道各地で活躍してほしいため。木材の国内資源への注目は高まっています。2019年度から森林環境譲与税の譲与が都道府県や市町村に始まり、木材利用の推進や普及啓発に充てられるなど、林業はますます熱くなっています」と寺田氏は力説する。



「道立北の森づくり専門学院」に期待！ 森を育て、人を育てる 北海道の森林産業の近未来

造林政策で植林した収穫期

北海道には、広大で豊かな森林が残されており、国内の森林面積の4分の1を占めている。ミズナラやカンバ、ブナなどの広葉樹林のほか、道南のスギや北海道特有のトドマツ、落葉針葉樹であるカラマツの人工林など多様な森林がある。戦後の拡大造林政策で植えられたカラマツをはじめとする人工林がいま伐採・収穫期を迎え、少子高齢化や慢性的な一次産業の労働力不足も重なって、森林産業の人材育成が急がれている。今年4月に道立北の森

づくり専門学院が旭川に開校したのはそんな背景からだ。道立北の森づくり専門学院は道内初となる林業・木材産業の専門学校だ。前高橋道政下で、設立検討を開始してからわずか3年で開校した。それだけ急がれていたということだ。道立の教育機関とはいえ、全道の市町村や林業・木材関連企業との緊密の連携・協力は不可欠として、北海道全域を実習フィールドとする「広域的な運営体制」

J Forest
北海道森林組合連合会
代表理事会長 阿部 徹
札幌市中央区北2条西19丁目1番地9
☎ (011) 621-4293 FAX (011) 644-3707

どうも 木れん
北海道木材産業協同組合連合会
代表理事会長 松原 正和
札幌市中央区北3条西7丁目1-2道庁西ビル
☎ (011) 251-0683 FAX (011) 251-0684



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<http://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)